
I S <インフィニット・ストラトス> ~偽り~

樹里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS>インフィニット・ストラトス< 偽り

【Nコード】

N6762Q

【作者名】

樹里

【あらすじ】

親父は大変な物を開発していった。

それは別にいい。だがな、なぜ俺がそれを操縦しなきゃいけないんだ？

女だらけの学園なんてありえねえ…

プロローグ（前書き）

小説の一卷を見て面白そうだと思いました。

続きを買いながら執筆しますよ

ブローグ

「……………」

薄暗い部屋。その中で俺は目を閉じてジッとしている。

『機動状況は？』

『現在89%、シュミレーション通りです』

うつすらと瞳を開けると、窓の向こうで何人かの科学者がパソコンに何かを打ち込んでいる。

まったく、俺はなんでこんなことしてんだろうね。

……………親父の頼みとはいえ、IS学園に転校ってふざけすぎだ。俺は普通の高校生だってのに。

（IS、正式名称『インフィニット・ストラトス』……………女性にして動かせない兵器…）

自分の握り拳を開く仕草を見ると、目の前の機械が動き出す。俺の動きがこの機械に伝わっている。

ISは女性にしか動かせない、つまり男性には動かせない。

（親父の研究の成果がこれか……）

それならばと、親父は発想を逆転させた。女性しか動かせない。なら男性にしか動かせないISを作ると。

本来ならばそんな事は不可能だろうが、それをこの親父は可能にした。

今はもういないが、母さん曰く俺が生まれる前から親父はこの研究をしていたらしい。つまり16年の月日をかけていた。よくやるよ、本当に。

『待たせたな、誠一郎。もう終わっていいぞ』

スピーカーから聞こえたその声は親父のものだ。俺はやつと終わったかため息をついてISを戻す。量子化したISは、俺の手のひらで待機モードになった。

……勘違いすんなよな。俺のこいつはISだがISじゃあない。

ISを真似て造った、まあ擬似ISって言えばわかるな。これが16年かけた親父の作品、俺専用擬似IS『銀』だ。

俺は近寄ってきた女性研究者からドリンクを貰い、親父のいる部屋に向かう。

ノックもしないで入るのは俺だけの特権だしね。

「親父、入るぞ」

返答を聞かずに俺は親父の部屋に入った。

「ん？ああ、誠一郎か。実験ご苦労様だな」

親父はあいかわらず机に向かって何かを書いている。俺に一言あるように、親父は俺を放置していたわけじゃあない。

小さい頃、休みの時は遊園地に連れてつてくれたし、家で遊んでくれたりもしてた。

まあ研究に没頭していたけどな。

そのあたり、一応俺は親父に感謝している。なので今回の実験もOKを出したのさ。

……転校ってやつは予想外だったが。

「ほう？彼が操縦者ですか？」

「ああそうだ、私の自慢の息子だ」

「……？」

今まで気づかなかったが、部屋の隅に一人の女がいた。
鋭い吊り目に、鍛えたボディライン…少し怖ええ。

「親父、この方は？」

親父が何か答えようとしていたが、それを吊り目女が遮る。

「南 誠一郎だな？私は織斑 千冬というものだ。今日は君に用があつてここまで来たのだ」

俺に用？親父絡みでは擬似IS関連しか思いつかん。そしてその女は俺をマジマジと見つめ、率直に言った。

「お前はこれからIS学園で私のクラスの生徒となってもらふ。なに、ご親族の了承ももらっている」

「……………は？」

俺は生まれて初めて思った。

親父、恨むぞと。

プロローグ（後書き）

ストラトスの意味がわかりません

キャラ・IS設定(前書き)

中国語って難しいですね

因みに読みがこれで合っているかはわかりません…

キャラ・IS設定

名前 南 誠一郎

身長 168cm

体重 58kg

IS学園の入学式直後に転校してきた少年。

その正体はISが女性にしか動かせない事に不満を感じ、
インフィニット・ストラトス
逆に男性用の擬似ISを作るという計画のテストパイロット。

彼自身は何の変哲もない男性のだが、科学者の父の要望によって
嫌々ながらも計画に参加しており、
最後までIS学園への入学を断っていた。

事実上、擬似ISを作り出すということは前代未聞なので学園には
この擬似ISの事は秘密にしている。

ただ一部の関係者、千冬などはこのことを知っている。

無論、一夏のように特別な存在ではないため普通のISは機動不可。
学園は女性がほとんどという事に相当動揺しており、実は結構ウブ。

吊り目で髪の毛が白いことがコンプレックス

[illegible]

専用擬似ISは「銀^{イン}」

奇襲、闇討ちを得意とする近距離強襲機。読みは「イン」であり、一部を除き武装当も中国読みになっている。

主な武装は無数の刀剣で、左手首に添って細刀を4基、右手首に添って大剣を1基、腰に短剣ナイフを左右に2基ずつ、そして手には「S」の字の両刃剣、計8基装着。

凄まじい量の近距離武装を装備しているため移動、加速エネルギーを他のISの約1/5倍消費するが、特殊機能と上手く運用することによって弱点を補うことができる。

しかし「銀」はあくまで擬似ISであり、『武器を量子化させて保存できる特殊なデータ領域』が存在しないこと、『自己進化』が無いことなど、一長一短である。

●
空 コング

銀の主力武装の両刃剣。「S」の字のように左右に曲がった形をし

ており、これを使って主な近距離戦闘を行う。
ただ重量が結構あるため素早く攻撃はできない。

・ 時^{セイ}

銀の右腕に装着されている大剣。折り畳み式で、展開すると「空」をも越える巨大な剣となる。

その巨大さ故に威力、攻撃範囲は凄まじいが、小回りが「空」以上に利きにくい。

盾としての役割も果たす。

・ 零^{リング} × 5

銀の予備武装である細刀。一基一基が名の通り細いので指の間、つまり爪のようにして持ち、

両手に2基ずつ持って素早い戦闘を行うことができる。中距離向き。

・ 幻^{ファン} × 2

腰に装着されているナイフ。斬り合いには向かないので投擲用。

特殊機能

・ N・S

擬似IS、「銀」の最大の特徴なのがこの装置。『ナノマシン・ステルス』と読む。

銀は体が特殊なナノマシンで構成されており、このナノマシンは自己修復機能が付いている。

なので生半可なダメージは即座に修復してしまう。

さらにナノマシンを鏡のようにして光を屈折させ、外見を認識不可状態にすることもできる。

これには膨大なエネルギーを消費するが、部分的に外見の一部を消す事もできるため闇討ちに向く。

・システムZ・D・F

????

キャラ・IS設定（後書き）

なつこに巻いておいてあげよう……

1話 転校試験 銀起動（前書き）

作者はセシリアさんが好き。

でもたまにセシリアかセリシアか間違える時ある。

1話 転校試験 銀起動

千冬と呼ばれたこの女性はどうかIS学園の教師であるらしく、話を聞かぎり俺の入学手続きどうこうって事らしい。

まあ、IS学園ってどこに入学することはもう決まっているし、今さら反論しても無駄だろう。

「擬似IS…『銀』…か。よくこんなものが作れたものだな」

パソコンに写しだされている『銀』を見て『千冬』先生は呟く。

「ISとほぼ変わらないスペック、男性のみ操作可能、そして…」

「『N・S』、ナノマシン・ステルスが存在、これが『銀』の一番の特徴だね」

先生の言葉に続くように親父が自信満々に言う。
嬉しそうだな、あんだ。

「南教授、この事の発表は？」

「そうだねえ… 条約云々があるし、まあするわけにはいかないね…
……ということで織斑くん、よろしくね？」

「わかりました」

なにがわかったのかは知らないがさっさと出ていってくれ。俺は親父に言うことが……

「なあ親父、この人は一体ど『ゴンッ』………あ？」

視界が傾く。意識が無くなっていくのがわかる。

「なっ………」

「悪いな、こうでもしないとお前は嫌がると言っていてな」

それがあの織斑によって気絶させられたのだと気づくにが遅すぎた。

…っっ！。

意識が戻ると、同時に激しい痛みが後頭部を襲う。どうやら何かで殴られて気絶したらしい。

普通こっぴうのって手刀で首の後ろ叩くとか、アレ、アレだよ。誘拐とかである布に薬つけて眠らすやつ。

そんなんでするんじゃないのか？鈍器で気絶って、ヘタすれば死ぬレベルだぞ。

「っーか、なにがあつたんだ？」

現在、俺がいる場所は家ではない。かと言って、どこにいる？と聞かれてもわからない。

こっちが知りたいくらいだ。

なぜか寝ていたベッドから身を起こし、辺りを見渡す。

誘拐みたいで石でできた部屋ではなく、ここはごく普通の部屋のようだ。

学生寮のような広さの部屋で俺はベッドに寝かされていた。
近くにあるテーブルにはなぜか俺のバックが置いてあり、その近くに手紙が置いてあるのが目に入る。

「手紙…？誰が…」

不信に思いながらも、俺は手紙を手取る。差出人は不明・・・てか書いてあるわけないか。

「えーつとお？……………『銀の基本武装、動きについて』？」

大きく見出しにはそんな事が書いてあった。全体に目を通すと『銀』の解説などが書いてある。

あーよくわからんが、とりあえずこれ見ておけってこと？
待機時の『銀』、つまり指輪は普通に俺が嵌めている。『銀』関連
ってことは何かあるなあ。

「まあ、目に通しておいて損はない・・・か」

擬似IS『銀』…。

普通のISと違い、名前の通り似て異なる兵器。基本的装甲はISと同じだが、色々細かい所が異なる、と。

写真では『銀』が正面、側面、背面の写真が載っており、それに一つ一つ詳しい説明が書いてあった。

まず肩装甲パーツ、名前は……『ZゾーンONE?』

普通の肩装甲とは違い、まるで大砲のような円筒の形をしていてそれが二個、左右の両肩に浮いている。

しかしこれは武器でもなく、スラスタでもないそうだ。一体なんの意味があるんだ？

次にヘッドパーツ。これも名前があるんかい。えっと、『DドライRイIVE
E』ね。

ヘッドギアのような装着型ではなく、起動時にはモニター型バイザーが展開される。

戦闘中はこれが顔の周りに展開し、戦闘のサポートをしてくれるそうだ。

「へー、こりゃ便利だなあって、サポートはISでも普通か」

戦闘のサポートって奴は本当に必要だ。ゲームで言う自動ロックオンのようなもの。

操縦者に装着する装備がないのは擬似だからかね。

どうせなら本物のISに乗りたかったと思いつつ、俺は手紙に視線を戻す。

えっと、次はフットパーツか。名前は『Force』………どうかの星戦争を思い出した。

スラスター型インビブルパーツ搭載？

これと言った性能はなく、ただ高速移動中に起動音が無くなるらしい………何に使うんだ？

「ふー、わけわかんねー」

あとは武装の事だったがそこは今見る必要はないと思い、シュッとテーブルの上に手紙を投げる。

しかし、ドラマのように上手くはいかずテーブルを通り過ぎ、床にポトッと落ちた。

俺は疲れたのでベッドに倒れ込み、そして蛍光灯の光を遮るように『銀』持って翳せる。

「俺の………専用擬似ISか………」

ちょっとうれしいなあ………なんて思ってたなら、

「またせたな南、もう準備はいいだろう?。」

「おわっ!？」

いきなり扉が開き、そこからあの織……何とか千冬先生が現れた。
当然のように俺は驚く。

「何を驚いている、これから試験だと言うのにそんな様子ではすぐに倒されるぞ？」

「いきなり入ってきてきてなんなんだあんたは!!ッて……………今、何て言いました？」

聞き間違いだろうか、今試験がどうか……

「何バカな事を言っているんだお前は。これからIS学園に入る試験をすると事前に言っておいただろう」

「言ってねえっすよ?。」

「む?そうか。まあいい、とりあえず付いてこい。すぐに試験を始める。予習時間ならいっぱいあっただろうからな」

そう言ってツカツカ出ていく先生……………え？

「試験？……………マジで？」

「モタモタするな！！、早く来い！！」

ギロつと睨まれる。少しびびった。

「……………はあ、逆らっても無駄か。先生だし。」

くー、世の中諦めが肝心ってね。

俺はため息を尽きながら渋々織斑先生についていった。

もうどうにでもなれえ……………。

連れてこられた場所はまさしく訓練所って感じの所だった。
フィールドを囲むように並ぶ観客席。おそらく模擬戦などではここ
がサッカーのワールドカップのごとく埋め尽くされるだろう。

しかし今はそんな国民全員が期待するようなイベントではなく、単
にごく一般の高校生の試合なので観客席はガラーンとしている。い
や、言い方を間違った。いるのは、

「おー、誠一がんばれよー」

親父一人だけだった。

……………なんかいい意味で涙出てきたよ。

「こつちだ、南」

先生と共に部屋に入ると、そこにはカタパルトのような物があつた。
どうやら普通ここでISを展開して出るらしい。

「よし、ここでお前のIS…おつと悪かった。『擬似IS』を出し
て見せる」

別に言い直す必要はないと思うが…
俺は言われた通りに指輪を外し、『銀』を起動することに集中する。

（俺のISは擬似であってISではない…でも、不満で思った事はない）

『銀』の起動を見るのが楽しみなのか、先生はジッと俺を見ている。

（擬似だろうと関係ない、親父に期待されたんだ。答えてやらないとなっ）

そう強く念じると、指輪が白い光を発して俺の体を包み込む。

「……………ほう、実物を見るのはこれが初めてだが…」

ゆっくりと目を開ける。俺の体はすでにISと一体化していた。親父と研究の時とは違い、両腕に重量感を感じる。武器が装着されているからか。

なんだろうな、この感じ…まるで母さんに抱かれているような、そんな温かさを感じる。

「試験官はすでにフィールドに出ている。行ってお前の力を見せて見ろ」

「わかりやしたッ」

静かに、キーンとか、シューーンとかの音は出ず。無音のまま『銀』に乗った俺はカタパルトから出た。

「ッし。いくぜえ」

持っている両刃剣を回転させながら、俺はこれからの模擬戦に多少ワクワクしていた。

「っとー」

フィールドに出た俺はとりあえず陸に着地する。よくよく言えば俺はIS操縦って初めてだもん。

「…さてっと」

IS展開に異常なし、動作安定。感度良好っと。

「ほう？不思議ISですね…あなたも専用機とは、世の中は狭いですね」

試験官だろうか。すでにそこには打鉄に乗った女性がいた。それ以外、特に書くような事はない。ただの試験官女性である。

でも『銀』は異型だからなあ、驚くのも無理はない。

試験官は刀を肩に担いでフツとため息をつく。あなた『も』ってことは……？

あれか。ニユースで言っていた世界で唯一ISを起動できる男性…親父の研究の終点だな。

先生の話じゃこの学園に行くらしいし、仲良くなれっかね。

「話はここまです。準備はよろしいですか？」

「ういっす」

俺は『^{コング}空』…だっけ？ 両刃剣を持っている手に力を込める。
なるようにしかないが…

「では…行きます！！！」

ビュンツといい音を立てて、打鉄に乗った試験官が刀を突き状態で突進してくる。

なので俺は、

「おらッ！」

「オーバー過ぎる動きですねッ！ 無駄が多すぎますッ！！」

『^{コング}空』を横になぎ払う。すると、横に簡単に避けられ、やべ、反撃喰らっちゃまう！

「今度はこちらからッ……」

試験官の女性は俺を見ている状態で横に高速移動しながら、

「キャッツ！！！！？？？？？？」

思いっきり壁に激突した。

「え？」

「あ、あう……………またやっちゃった…むきゅ……」

激突した試験官はピクピクし、そしてバタツと倒れた。

「 「 「 「 「 」 」 」 」 」

場が静まる。

俺以外にも織斑先生、いつの間にかいる巨乳の先生、拳句の果てに親父まで皆ボカーンとした顔になり、

【.....勝者、南 誠一郎】

俺の勝利を告げるアナウンスが流れる。

.....え？ 終わり？

こうして、俺は晴れてIS学園の試験に合格したのであった。

1話 転校試験 銀起動（後書き）

誠一はオリキャラであって、オリ主ではないです。

2話 自己紹介 『織斑一夏』との接触（前書き）

最近友人が『ラウラやべえwラウラマジやべけw』ってうるさいです。

私は原作一巻、アニメは3話しか見てないのでラウラ、シャルルあたりはよくわからない。

でも個人的にあのヤンデレっぽい格好は好きだな

2話 自己紹介 『織斑一夏』との接触

「……ああれ？」

合格、という言葉聞いてもまったく喜べないのはなぜだろう？……
なぜだろう？ 俺は今、会場から異例の速さで車で移動中である。
無論、目的地は、

「着いたぞ、ここが今日からお前が通う事になる、IS学園だ。何
ボヤッとしている、早くしろ」

助手席に座っていた俺の耳にきついボイスが入る。俺の担任らしい、
織斑千冬先生である。

「……………あー」

のそのそと助手席から出て半覚醒状態の頭を軽く叩き、眩しい太陽
の光に照されている建物を見上げる。

IS学園。

なんの技術から知らんが、ちよくちよく建物に表示される学園の名
前。正式名称は勿論『インフィニット・ストラトス学園』である。
俺も詳しい事は知らないが要するにIS操縦のエリートを育てる学
園って言えばわかるか？

「…で、お前が入るクラスは……………おい、南」

「……………はい？」

ゴッ！！と。

石頭の俺でも意識が手放すほどの衝撃が後頭部を襲った。すごく痛い。

「馬鹿もの、ちゃんと話を聞いていないか！！　これはお前の事だぞ！！」

「あたたた…いやあ、すいませんね。何せ予想外の広さに驚いていました」

「…まったく、まあいい。もう知らん、詳しくはこれを見る」

ポンツと、とても厚い辞書のような本が投げ渡された。まさかさっきこれで殴ったのか？

あんた昨日もそうだったけど俺を殴りすぎだろう、これ以上頭が悪くなったらどうしてくれる。

「私は会議があるため一緒には行けない。教室まではその本に書いてある地図を見る事。」

…初めてで色々解らないと思うが、頑張る事だな」

「……うい、わかりました。わざわざ送ってくれて有り難うございます」

「…………ふん」

織斑先生はフツと笑ってそのまま学園の中へ入っていった。なんかカッコいいな、この先生。

「すう~~~~っはああ……」

深呼吸し、俺は改めて自分が通う事になった学園を見る。

「……………まあいい、か。さて、俺の教室はっ」と

うだうだしてるより、今後どうやって楽しく学園生活を送れるか考えましよう。女子が過半数…いや、男子二人でも何とかなると思うが。

俺は先生からもらった本から地図を広げる。

.....。

.....。

.....。

.....。

.....。

「だめだ、まったくわかんねえ」

これは本当に地図か？ と疑いたくなるほどの学園は「ちゃーちやしていた。要するに広すぎ。」

「ま、歩きゃそのうち着くだろ」

地図なんて無意味無意味、頼れるのは自分の頭だけさね。よしレツツラゴー、だ。

.....

うん、まあ予想はしてたよ。とりあえず…

「ここどこだ？」

本当に広すぎだろこの学園……教室さえどこにあるかわかんねえぞ？

辺りを見渡してみても生徒の姿はまったく見当たらない。それは今日が入学式だからだろうが。

「…っー………たくめんどうだよ本当に」

寝起きの状態で歩いていたので少々頭が痛くなった。俺は近くにあったベンチに腰を下ろし、深くため息をついて空を見上げた。

…相変わらず広い、蒼いね。

本当は黄昏れている場合じゃないんだけど、このまま歩き続けて目的地まで行けるか謎だ。

ここは大人しく誰かが通るまで待つとしよう。

俺はベタツとベンチに倒れた。寝そべってるんじゃないよ、体を横に倒しているだけだよ？

「……………おお？」

横に倒した瞬間、ポケットから何かが落ちた。

これは…手紙？

勿論覚えなんてなく、俺は頭をガシガシ掻いてその手紙を拾う。例のごとく差出人は不明つと。

「どうも俺は手紙に縁があるっぽいね」

中身を開くと、そこには何枚かの書類が入っていたのだが、

「えゝつとお？……………おいおい、何だよこりゃあ……………」

そこには驚くべき事が書かれていた…………。

『愛の監視対象』

『織斑 一夏 日本。専用IS【白式】』

『セシリア・オルコット イギリス。専用IS【ブルー・ティアーズ】』

『鳳 鈴音 中国。専用IS【甲龍】』

『シャルロット・デュノア フランス。専用IS【ラファール・リヴァイヴ・カスタムII】』

『ラウラ・ボーデヴィツヒ ドイツ。専用IS【シュヴァルツェ・レーゲン】』

「以下五名はISの専用機持ち、『銀』の研究に応用出来るかもしれないから彼らのISをよく観察しとけばいいと思うぞ。」

b y お前の親愛なる父親より。

P・S この中でわしがお勧めなのはシャルロットちゃん。嫁にもらってきたら父ちゃん大いに喜ぶ。

「……………」

俺は無言でその手紙を破り捨てた。

……………

「おお、ここか」

どうでもいい手紙のせいで時間食ってしまったが、俺は何とかクラス
スの校舎までたどり着く事が出来た。

あの時近くにいた女性局員に聞いていなかったら今だ俺は学園内を
彷徨っていただろう。

持ちにくい分厚い本を広げ教室を確認する。確か俺の組は一組のは
ずだ。

「4組…3組…2組…つと、ここか」

歩めていた足を止め、俺は自分のクラスのドアを開ける。よし、
最初は清々しくね。

「すみませーん、遅れましたー……………って、おお？」

間抜けな声が出てしまった。

だって仕方がない。

「……………」

みんなこっち見てるんだもの。

「……………」

突如後ろから入ってきた俺をクラスの女子は全員凝視していた。な、なんだ？

「南……貴様ようやく現れたと思ったら……今何時だと思っている……！」

教壇では織斑先生が頭を押さえて唸っていた。あら先生お久しぶり。

「久しぶりではない！ 今朝別れたばかりだろうが……！」

「「「「「（！？）今朝別れた！？」「「「「「」

「あれ、今朝先生の車から降りた時から結構時間経ってたと思ったんですけどねえ……いやすいません」

「「「「「（千冬さんの車から降りた！？）「「「「「」

「はぁ……一夏だけでも手を焼いていると言つのに………お前まで私を悩ませるのか……」

「いやいやぁ、遅刻したことは本当に申し訳ないと思っていますよ。反省もしています」

これは本音だ。わざわざここまで送ってきてくれたというのにこの仕打ちは悪かったと思う。
ここは素直に謝っておく。

「……はぁ」

織斑先生は深いため息をつき、顎をクイツと横に向けた。どうやらもついいから席につけ　という意味のようだ。

言われた通り、俺は窓際最後尾の机に着席したのだが、

「誰が座っていいと言った。お前の出現に皆が驚いていないか。ちゃんと説明しろ」

「…あああ」

そういえばクラスの大半はポカーンとした表情で固まっている。そりゃいきなり現れたのが男じゃ驚くよな。

俺は再び席を立ち、軽くクラスの生徒を見渡しながら言った。

「失礼、遅刻して挨拶が遅れました、南 誠一郎と申します。まず、勘違いしている人がいるかもしれないのでいちを言っときます」

俺は横目で視線を一夏君に向け、

「俺はそこの一夏君みたいにISを動かす事が出来ません」

教室中がざわめく。まあしゃーないわな。俺は軽く咳払いをして言葉が続ける。

「ここに入学した理由は、ISの研究をするためです。本来ならこ

のような理由で入学は許されませんが、とある人物のコネで特別に許してもらいました。場違いではありますが、一年間宜しく願います」

戸惑いながらも起こる拍手の音を聞きながら、俺は着席した。

「……ふむ、一夏よりはまともな挨拶は出来るようだな。次!」

織斑先生が指示すると、次の生徒が立ち同じように自己紹介を始める。

やれやれ…女子だけって聞くだけならウホッと思うかもしれんが、これは精神的にきついぞ…。

(親父イ…恨むぞお)

「…ねえ、あなた?」

「…?」

一人で頂垂れていると、隣の席の女性が話しかけてきた。ウェーブのかかった金髪、明らかに日本人ではないな。

…うつむ、親父の手紙で見たぞ? こいつは確か…。

「これはこれは、誇り高いイギリスの代表候補生、『セシリア・オルコット』さんではありませんか」

セシリア・オルコットは、俺の言い方に關心したのか少し嬉しそうな顔をする。

「あら、わたくしの事はご存知なのですね。流石はISの研究をされてる方ですわ」

「それはそれは。ISでも専用機持ちという人物は少ないですからね。

貴女の可憐なIS、『ブルー・ティアーズ』の性能は俺の耳にもよく入って来ますよ」

「ふふん、そうですね。このセシリア・オルコットはこのIS学園の入学試験で試験官を唯一倒した人物なものですから。貴方は見る目がありますわ」

なんだこの女。

ちよっとよいしょしたらペラペラと自慢話をしてくる。

まあ専用機持ちってんならそれなりの実力持ってるんだろうけどさ。つか試験官ってあいつか？ あの手腕に壁突っ込んでいった奴。ということは俺も倒した事になるんだが…。

「そして我がオルコット家は当然のごとく母国、イギリスの代表生に選ばれ…」

今だ延々と、気持ち良さげに話しているこのオルコットさんにわざわざ水を指す事もないか。

俺は黙って彼女の愚痴？ を聞いていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「なああんだ…確か、南つて言つたよな？」

織斑先生のSHRが終わり、休み時間になると案の定、織斑一夏は俺に近づいてきた。

こんな女子しかいない中で唯一の男同士だ、そりゃ心細くなるね。なので俺はさわやかに答えてあげる。

「おう、そうだけど。君の事は聞いてるよ、織斑一夏君」

「え、俺の事知ってんのか？」

「おおつと言わなかったっけ？ 俺はISの研究のためにこの学園にいんだよ。だから男でISを動かせる君は、こっちじゃ結構有名なんだぞお？」

「そ、そうなのか…でも良かったよ、俺以外にも男がいてさ。正直俺一人だけだったらと思うと不安で…」

「解るぞ、解るぞ一夏君、その気持ち。不本意でここに来てしまったその気持ち、痛いほど解る」

俺は織斑一夏君の肩をポンポンと叩く。

「さて、本来ならばここで一夏君と友情を誓い合いたかったのだが…時間がないようだ」

「ん？ どういうことだ？」

俺は肩をすくめた後、不思議そうな顔をしている織斑一夏の後ろを指さし、

「先客がいたようだ」

「……………え？」

織斑一夏の後ろには、鋭い目つきで俺たちを睨んでる、

「……………ちょっといいか」

篠ノ之 箒がいた。

「ほ、箒…？ え、い、今はちょっと、あ、いやでも…」

織斑一夏は驚いている様子で俺と篠ノ之を交互に見るので、手をヒラヒラしてお先にどうぞアピールする。

「……………ん」

すると篠ノ之は軽く頭を下げて一夏を教室の隅まで連れていく。

「……………」

「……………」

そして二人は二言ほど何か話した後教室を出ていった。残された俺は、出ていった二人の後を見て考える。

（織斑と篠ノ之…今のやりとりからすると幼馴染みってところかね）

微笑ましいもんだ、知り合いがこの学校にいただけ羨ましいよ。さらに彼はISが起動できる。俺みたいに擬似ISではなく本物のISをだ。

そう考えると、なんだか比較されそうでいやですねー。いや、俺はそもそもISは起動できないから比較される心配はないのか？

「あの織斑　一夏という方、どんな人でしたの？」

「……………おお？」

しばらくボケーっと考えているとオルコットさんが話しかけてきた。彼女は俺と同じく、二人が出ていった後を見つめている。

「なかなか面白そうな人ですかね。オルコットさんとしては彼がどんなISの腕を持っているか興味がおありで？」

自称、イギリス代表候補生で『私TUEEEEEEEEE』である彼女としては気になることだろう。

「ええ、まあ。わたくしはこのとおり、イギリス代（ryですから、この『寛大』な性格故に少しでも彼の助けになれるか、と思ひまして」

「さすがはオルコットさん、誰にでもお優しい」

「ふふん、当然ですわ！…それと、あなた確か 南 誠一郎 さんでしたわね？」

いまさらだがやっと名前を呼んでもらった気がするが、こんな高飛車な女に呼んでもらっても嬉しくともなんともないのはどうしてだろう。

「ええ、ISも動かせず、ただただ研究に没頭するだけが趣味なヌルヌル誠一郎です」

「又、ヌルヌル？…コホン、まあいいですわ。これから貴方の事を誠一郎さんと呼びすることにします。なので貴方も私の事をセシリアと呼んでもよろしくてよ？」

そう言って手を差し伸べてきた。

「……………」

なんだ、俺がいつ下で呼んでいいと言った。俺が言うのもなんだがこの女馴れ馴れしいぞ。最初のSHRと言い、お節介とは違うこの世話好きな性格は一体なんなんだろうな。かといってここで断ればややこしくなることも確実…ここは折れますか。

「ほう、オルコットさんを名前で呼ぶことが出来るとは光栄の極み。今後ともよろしくお願いします、セシリアさん」

その手を俺は優しく掴む。女の手ってやつは初めて触るが柔らかいもんだね。

「ええ、宜しくお願いしますわ……あら、どうやら戻って来たようですね」

オルコットの視線の先に目を向けると、ちょうどいいタイミングで織斑と篠ノ之が戻ってきた。オルコットはフンと笑った後、その長く綺麗な金髪を手で靡かせながら、

「それでは、私は彼にISについて色々聞かせてあげることになりますわ。それでは誠一郎さん、また後ほど…」

「ええ、彼も喜んでくれるでしょう、頑張ってください」

んなわきゃねえだろ、俺ならともかく普通の人間ならキレても不思議じゃねえぞ。

「まあ！ なんですその返事！！ わたくしに話しかけられるだけでも……………！！！」

「なんなんだよ、いきなり話……………！！！」

案の定、織斑はセシリアの話を真面目に聞いてはおらず、二人は討論になっっている。

俺は激しい言い争いをしている猿同士のケンカを見ているような感覚で二人を観察していた。

「……………っ！ 話の続きはまたあとでしますわ！ 逃げないことね！！！」

戯れ？ が終わったのか、ものすごい形相でズンズンとオルコットがこちらに戻ってくる。

そして何を思ったのか俺の机の上で手をバンッと叩き、

「まったく！！ 何なんですよあの男は！！ せっかくこの私が親切にしてあげたというのにあの態度、信じられませんわ！ 誠一郎さんの爪の垢でも煎じて飲ませてあげたいくらいですわ！！」

「……………はあ、ご愁傷様です」

「男で唯一ISを起動できるからって、誠一郎さんのような紳士的な性格と思いきや！！ 野蛮な猿みたいな方でしたわ！！それにそれに……………！！」

「……………はあ」

この後休み時間が終わり、次の授業が始まるまで延々と彼女の愚痴を聞かされていた俺である。

2話 自己紹介 『織斑一夏』との接触（後書き）

男はやっぱりセシリア

3話 クラス対抗戦 推薦編（前書き）

今回は文章を改変、読みやすさを重視してみたのですが…

変わってますか？

3話 クラス対抗戦 推薦編

時刻は午前十一時、ほとんどの学校では三時間目に当たる時間である。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

今教案に立っている織斑先生と違って一、二時間目は山田先生がIS関連の授業をしていたのだが、正直俺には関係のない事ばかりで右から左へと熱心な授業内容は通り抜けていった。

何度も言ってるけど、俺はISを動かせないからそれ関連の授業は正直無駄なのだ。そりゃ『銀』もISと似ている所があるからと最初は真面目に聞いてみたけど、やっぱり所々違いが見られたので参考にする事は難しい。

(これは退屈だねえ……)

ISの研究っていう名目でこのIS学園に入学したものの、意外に暇だ。実際研究なんてしててわけじゃないしね。

なので織斑先生直々のこの授業も昼寝してサボろうかなと考えていたのだけれど、

「ああ、その前に再来週行われるクラスの対抗戦に出る代表生を決めないといけないな」

興味深い事を先生が言った。

対抗戦…？ ああー、そういえばそんなやつあったな。確かこれで代表になった生徒はその学年中はずっと委員会の出席とか生徒会の会議に出ないといけないらしい。それだけならまあ誰でもいい気がするけど、一番のプレッシャーはさつき織斑先生の言ったクラスの対抗戦だね。

「まあ、クラス対抗戦なんて、この私が選ばれば優勝したも同然ですわ」

ボソツと隣の席にいるオルコットさんがそんな事を呟く。確かに彼女は専用機持ちであるため他のクラスに遅れを取る事はないだろう。代表候補に選ばれるくらいなのだから実力も折り紙付きか。

まあ普通ならばここで彼女が代表生に選ばれるのは必然であり、俺もそうなるかなと思っていた。

しかし、

「はいっ。織斑君を推薦します！」

「…ええっ!？」

俺とオルコットさんは同時に驚いて手を挙げた人物を見た。

「私もそれがいいと思いますー」

「私もー」

すると次々に挙がる『織斑を代表生にしよう計画』

これは意外だった。俺はてっきり彼女の实力を認める誰かが彼女を推薦し、それに便乗して他の生徒もオルコットさんを推薦するかと思っていた。しかし現実はこちら、織斑が選ばれている。

この展開に当の彼女は納得するはずがなく――

「待ってください！ 納得がいきませんわ！」

当然のように反論するのは、勢いよく席を立ったオルコットさんである。

「二人とも元気だな〜っと、そういえば…」

なぜ私が選ばれないどうか、イギリスの料理がどうか、決闘しましょうどうかでくだらない口論を始めた二人を見ながら俺はあることを考えていた。

（そういえば…『銀』の実力って、普通のISがどれくらい敵うものなのかね…擬似ではあるけど基本的な構造はISと一緒にだからそんなに離れているとは思えないし…）

密かに俺は心に『銀の実力を確かめたい』という思いを抱いていた。自惚れているかもしれないけど、やっぱり自分の使う兵器の力は知っておきたいものと思ったのだが、そうなるここで問題が出てくる。

まず一つ目の問題、それは『銀』の存在自体が極秘な事。

簡単に言うと『銀』である『擬似IS』は開発と同時にする認証コードと網膜登録をすれば誰でも動かす事が出来る兵器である。この存在が意味する事…それは国の定めた『女性優遇制度』の意味がなくなる事だ。

そもそも『女性優遇制度』なんていうおかしい制度が生まれたのはご存じの通り現代の最強兵器であるISが女性にしか動かせないため。

もし『銀』の存在が政府やマッドサイエンティストみたいな研究者に知られればその技術を提供しろと行ってくるのは100%確実。そうなる第一操縦者の俺と『擬似IS』の開発者である親父が『保護』という名の拉致をされるのは目に見えている。

しかも問題はこれだけではない。

『銀』の力試しを実行するために越えるべき問題その2。

どのようにして『銀』の存在をばらさずに実力を確かめるか？

仮にも、俺が『世界で二人目のIS操縦者』としてのレッテルを貼られたのなら人前で堂々と『銀』を起動する事が出来る。しかしこの可能性は皆無に等しい。

まず当然の事で俺はISは動かせず、ISの練習機もどきである『打鉄』を操作出来ない。

織斑のように特例でISを動かすにはその照明が必要なのだ。その照明はISを動かす事は勿論の事、適正值など色々体を検査させられる。

もしこの検査で適正值がF以下であれば俺の嘘がばれ、結果的に『銀』の存在が公に出てしまう。それにそんなせい真似をすればクラスからの冷たい視線は免れない……うお、想像しただけで冷汗出るわ。

(……………駄目じゃん……………)

10分間の思考の結果、俺は『銀』の実力を知ることが出来ないという結論に至った。

「なんか、宝の持ち腐れって言うか…もったいないよな…」

結論は出た…しかしそれに納得出来ない俺がいる。

どうしたものか…。

……………。

……………。

……………。

……………。

「……………そうだ!!」

俺は ティン！ と来たアイデアを実行するため、織斑先生の元に
急いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6762q/>

I S <インフィニット・ストラトス> ~ 偽り ~

2011年3月31日22時58分発行